

金岳公子【松平左近】旧蔵

本隆寺日真上人著『観心本尊抄見聞』について

和田 晃 尚

一 問題の所在

金岳公子【松平左近(さこん)・頼該(よりかね)文化六年(一八〇九)〜慶応四年(一八六七)】(以下公子と略称する)旧蔵の、本隆寺日真上人(以下真師と略称する)著『観心本尊抄見聞』(以下『本尊抄見聞』と略称する)上・中・下三巻の写本が、高松本覚寺に現存する。(以下この本を『テキスト本』と略称する)それを基にして、昭和四十四年三月二十九日、法華宗(真門流)宗学研究所より、マイクロフィルムによる複写本(以下『マイクロフィルム本』と略称する)が、限定出版された。また昭和四十四年四月十三日には、法華宗真門流宗務庁教学部より、『法華宗真門要集 卷三』として、『マイクロフィルム本』を基に、謄写刷りの『本尊抄見聞』が限定出版された。なお『法華宗真門要集 卷三』には、真師の『御書拔書』が『本尊抄見聞』と共に、同じく謄写刷りで収められている。幸い私自身、『テキスト本』を目にする機会に恵まれており、『マイクロフィルム本』との比較も容易に出来うる立場にいる。また真門流より、それ以後、『本尊抄見聞』に関する報告は管見の限り、出ていないように思われる。よっ

本隆寺日真人著「観心本尊抄見聞」について

て今回は、『テキスト本』の紹介を中心として、真師の『本尊抄見聞』について、考察を試みたい。

二 『テキスト本』の現状

『テキスト本』の現状について、ここでは詳しく紹介しておきたい。

『テキスト本』は、縦九寸二分【 23.5cm 】、横六寸四分五厘【 16.5cm 】の和綴じ本であり、上・中・下の三巻よりなっている。最近一つの帙を作り、帙入り本として、上・中・下三巻をまとめて保存されている。帙を作るまでは、三冊を上重ねて書架に保存していたのであろう、本の地の部分（本の背を右にして横にした場合に正面に見える部分）には、それぞれに右から「本尊見聞 上」・「本尊見聞 中」・「本尊見聞 下」と墨書されている。保存状態は、比較的良好であり、一部に虫食いの跡はあるものの、文字が読めないほどのものではない。表紙は、コバルトブルーの型押し模様様の紙が使われている。

上巻の題箋は、白紙を貼り付け、そこに「観心本尊抄見聞 上」と記されている^⑧。また内題も同じく「観心本尊抄見聞 上」と記されている。

中巻の題箋は、上巻と同じく白紙を貼り付け、そこに「観心本尊抄見聞 中」と記され、内題は「観心本尊抄第三入文判尺中」と記されている。

下巻の題箋も上・中巻と同じく、白紙を貼り付け、「観心本尊抄見聞 下」と記され、内題も同じく「観心本尊抄見聞 下」と記されている。

上巻の墨付きは、五十三丁であり、その内本文は、五十二丁ウ八行迄で終わり、一行空けて、五十二丁ウの空いた

スペースに二行に亘って奥書が記されている。更に五十三丁ヲには、跋文が記されている。

尚上巻の本文の始めより、二十九丁ウまでと、それ以後とは、明らかに別人の筆跡であり、少なくとも、二人の筆者によって、この『本尊抄見聞』が筆写されたと考えられるのである。^④ またそのことは、本文の始めより、二十九丁ウまでは、一丁に二十行書写されているが、それ以後、下巻の本文終わりまでは、一丁に二十四行書写されていることから判り、書風も書式も明らかに違うことによって、二人の手によって筆写されていることが、確認できる。^⑤

中巻は、墨付き四十二丁で、本文は四十一丁ヲ十行迄で終わり、一行空けて最後の一行から四十一丁ウの一行目までの二行に、奥書が記されている。

下巻は、墨付き四十二丁である。本文は、三十七丁ウ七行で終わり、一行空けて、三十七丁ウ九行から三十七丁ウの最後にかけて、二行に亘って奥書が記されている。更に三十八丁ヲより三十九丁ウ一行目にかけては、別の書物である、『鎌俣問答見聞』が筆写され、更に四十丁ヲには、跋文が記され、四十丁ウは白紙、続いて、四十一丁ヲに別の跋文が記され、四十一丁ウは何も記されていない。跋文については、更に項を改めて検討を試みるつもりである。が、ここで四十丁の跋文も四十一丁の跋文も、ひいては上・中・下巻全ての奥書も同一の筆になることを特筆しておきたい。

三 『テキスト本』の伝来

高松本覚寺蔵の『テキスト本』について、現段階で判ることは、この『テキスト本』が、かつて金岳公子の蔵書であり、その没後、高松本覚寺へ収められた数多くの書物の中のひとつであるということである。公子は数多くの書物

本隆寺日真人著「観心本尊抄見聞」について

を蒐集し、また多くの書物を自らも写し、人を使わして写さしめたりもした。それは尼崎本興寺の日隆聖人の御聖教はいうまでもなく、藩内・江戸・京阪・その他の各地より収集されたという^⑧。それらの公子手沢本は、公子没後その遺言によって、日常の諸什器と共に、本覚寺へ寄贈されたものである。公子の蔵書は、それぞれの表紙に千字文の漢字が朱書されている。これは、公子が書物を書架に置く際、千字文の漢字によって、グループ分けをし、自分の使い勝手のよいように蔵書を整理していたと考えられるのである。『テキスト本』は、「為」の字が三冊とも表紙の右肩に朱書されている。

『テキスト本』には、諸処に朱の書き込みが有り、それは読み仮名、句読点、返り点の補足、誤字の訂正、文章の補足、見出し等であり、本の題名は、文字に重ねて朱の二本棒を施し、人名には、文字の右横に縦の一本棒を朱で施してある。またまれに欄外に長い文章の書き込みがみられるが、これに関しては、公子以後の人の書き込みかと考えられるのである。特に朱の書き込みが多いのは、先程の、前半部分（上巻二十九丁ウまで）の部分に多く、書風も朱の書き込み部分は、同一人物であることからして、公子自ら朱の書き込みを加筆された部分と考えられるのである。また書風が明らかに変わる上巻三十丁ウからは、朱の書き込みが、随分と減るのである。

ともあれ、以上のように、『テキスト本』は、公子在世中に筆写され、没後本覚寺にもたらされた書物である。

四 『テキスト本』の奥書・跋文に関して

次に公子が筆写した『テキスト本』の元となった本（この本の存在は現在確認できていないが、今は仮にこれを『オリジナル本』と呼ぶこととする）が、現在どうなったか、あるいは公子当時何処にあったものなのかという問題

が生じてくる。その問題を考える上で『テキスト本』の奥書・跋文に関してみていきたい。ともあれその原文を左記にあげる。

【上巻奥書】

観心本抄見聞

三帖之内
上巻

右抄者本隆寺大経房日真講談云

(五十二丁ウ)

【上巻跋文】

日善

奉寄進観心尊鈔 三冊之内

本隆寺開山日真作

摂州尼崎本興寺常任

日顕

貞享元 甲子 年極月十五日

本興寺御文庫納之者也 (五十三丁ヲ)

【中巻奥書】

観心本尊抄見聞

三帖之内中

(四十一丁ヲ 最後の一行のみ)

右拙者(マ)日真講談云

(四十一丁ウ 最初の一行のみ)

【下巻本尊抄見聞奥書】

観心本尊抄見聞

三帖之内
下巻

右此抄者本隆寺日真講談云

(三十七丁ウ)

本隆寺日真人著「観心本尊抄見聞」について

【下巻鎌隼問答見聞奥書】

鎌隼問答見聞訖

日善

(三十九丁ウ)

【下巻跋文】

奉寄進観心本尊鈔 三冊之内

本隆寺開山日真作

摂州尼崎本興寺常任

日顕

貞享元 甲子 年極月十五日

本興寺御文庫納之者也

(四十丁ヲ)

本尊鈔見聞三帖先亡信受院得此

抄於学友許任遺言奉返納候

薩州同國中

享和元年 辛酉 四月十二日

題号ノ如来滅後ノ下ヲ拜シ愚 本興寺

日 妙「花押」

案勘考 スルニ 真師四十二才ノ製

作ト見ヘタリ

大永二年十二月鎮師之状云日真等 本能寺

捨一致邪執婦勝劣御門流候云已来 日 暉 「花押」

一塵無別心云此抄當流之證拠歎慎拜読畢

(四十丁ウ)

と記されている。先述の如く、この『テキスト本』の筆写者は、二人の手になるものであるが、今挙げた各巻の奥書・跋文の筆写者は、第二の筆者、(つまり上巻三十丁より下巻の最後まで)一人によって筆写されたことが、原本によって確認できるのである。このことは『テキスト本』が文字通り写本であるということの証左となる。またそのことは、下巻跋文の日妙・日頭の花押の部分に双鉤填墨の技法が使われていることから、確認できる。また、『鎌筆問答見聞』もその奥書、最後の跋文部分も全て同一の手になるものであることからしても、『テキスト本』が写本であるということが再確認出来るのである。

さて、この奥書・跋文についてわかることは、

一、現存を確認できない『オリジナル本』が、貞享元年(一六八四)十二月十五日に両山二十八世日頭上人(尼山在住 一六八四〜一六八九)の代に、本興寺の御文庫(堂)へ山納されたこと。

二、一度山外へ流出した『オリジナル本』が、薩摩の国の(既に亡くなった)信受院何某が学友より得て、その遺言によって、再び本興寺へ返し納めたこと。その時期は、享和元年(一八〇一)四月十三日付けの、日妙等の跋文

本隆寺日真人著「観心本尊抄見聞」について

が存することから、遅くとも享和元年四月十三日より以前と考えられること。

(ちなみに日頭は、この年十二月十一日に遷化)

三、日妙・日暉の時代には、おそらく本興寺にあったということ。『オリジナル本』には、日妙・日暉の直筆の花押が書かれてあったということ。

四、『オリジナル本』にすでに、『鎌俣問答見聞』が付随していたこと。

である。『オリジナル本』が、その後再び本興寺より流出したということは、想像できうるが、それが現在何処にあるのか、また八公子当時何処にあったのか、という問題は、今のところよく判らない。現在は本興寺の『寺宝目録』(平成三年一月二十六日発行)にその記載は無い。

さらに日頭の跋文の前に、日善の署名があるが、あるいは、『オリジナル本』も、この日善の筆写した写本であった可能性もないではない。しかし『テキスト本』が、今のところ現存する唯一の写本である以上、この問題を解決するには、今後の調査を待たなければならない。

五、『テキスト本』と『マイクロフィルム本』の異同について

ここでは、些細なことではあるが、『テキスト本』と『マイクロフィルム本』の異同について紹介しておきたい。

『マイクロフィルム本』十七頁(テキスト本上巻八丁ウ)は、『テキスト本』によると、最初の一行は朱筆の書き込みであり、『マイクロフィルム本』では、この朱筆の書き込みをも含めて本文としてとらえ、その朱筆に高さを揃えてあるため、本文が一段下がってしまっている。この本の書かれ方は、「尋云・答云」という部分と、「私云」という部分に分かれており、「尋云・答云」より「私云」が一段下げて書かれている。『マイクロフィルム本』の当該頁の高さは、実は「私云」の高さである。原本で確認すると、当該頁の箇所は「尋云・答云」の部分であり、もう一段高くする必要があったが、朱筆の書き込みが高い位置にあったため、それに全体を合わせ、ほかの頁とは倍率を変えてプリントしたようである。同じことが、二十八頁(テキスト本上巻十三丁ウ)にもいえる。やはり一段下げて、プリントされており、「私云」の部分のようになってはいるが、これも一段上げる必要がある。また『マイクロフィルム本』二七五〜二七九頁に関しては、『テキスト本』には無いということも付言しておく。^④

六、書誌学的問題について(むすびにかえて)

本隆寺第七世後不輕院・證誠院日脩上人(一五三二〜一五九四)の著、『真流正伝抄』^⑤の中に、「眞公興二行^{シマ}三大部ノ科文並ニ妙經一部ノ文段ノ事、拜見^{シテ}此忠公ノ御義ヲ起^ル也、」の一文が示すように、日真上人の孫弟子たる日脩上人の、日真上人の著書に関する認識は、『天台三大部科註』と『法華経註(文段経)』であり、『真流正伝抄』全体を通じて、『本尊抄見聞』に言及する処が、一ヶ所もないということは、日脩上人は、その存在を知らなかったと言わざるを得まい。

『マイクロフィルム本』三十四頁に、「(仏滅年代の説を挙げて)此説に依る時は、文明十七年までは、滅後二千四

百三十四年に当るなり。宗師は初の説を用ひたるか云云爾見たり。」【○内は筆者補、また書き下し文とし、句読点をほどこした】の記述により、当抄の成立を一応文明十七年（一四八五）とすると、日脩上人が『真流正伝抄』を上梓したのが、天正七年（一五七九）であるので、百年の間、門下の学匠達の目にもとまらず、消えてしまったこととなる。

さて当抄がはじめて登場するのが、本能寺第三十二世・細艸大龜谷檀林化主、蓮華院日勢上人（一七〇六）の『観心本尊抄記』別名『観心本尊抄日勢上人講述 上・下』略称『観勢記』である。この本は宝永三年（一七〇四）の著作であり、この中に「真抄に云く」あるいは「日真抄に云く」として、真師の『本尊抄見聞』を多く引用しているのである。管見の限り、当抄が文献として現れた最初のものである。

直弟子、孫弟子等の目に触れなかった開基上人の書物が、約二百年後に、それも他門流によって紹介されることとなる。この二百年余りの空白をどのように考えるのか。本当に真師の製作であったものが、弟子・孫弟子の目に触れず、他に伝わり二百年の歳月を経たものか、あるいはまた、その二百年の間に、真師によせて他の者が作ったものなのか、当然そこには大きな疑問が生じてくるのである。

また先述の如く、『オリジナル本』に（これも写本である可能性はあるが）既に天文二十三年（一五五四）九月の完成になる『鎌俣問答見聞』が付随されていたことからすれば、『オリジナル本』の成立は、それ以後ということになる。ともあれ『本尊抄見聞』が、真師の親選もしくは、講談とみなすことに、些かの疑問が生じるのである。

註

- ① 私は現在、高松本覚寺の副住職として、本覚寺に住しており、真師の『本尊抄見聞』をはじめとして、公子の蔵書を容易に目にするのできる立場にいる。
- ② この墨書は、「本尊見聞」が、三冊とも草書で書かれており、「上・中・下」の字はそれぞれの巻に楷書で書かれている。おそらくは公子の直筆と思われる。三冊を重ねた時、三冊それぞれの字が、一分の隙もなく上下にピッタリと合うように書かれており、公子の几帳面さがうかがえるのである。
- ③ 題簽の筆跡は上・中・下共同一筆跡であり、公子の直筆と考えられる。
- ④ 『マイクロフィルム本』序文四頁寛字日丈師の『松平金岳公子筆写本観心本尊抄見聞の出版刊行に序す』の中の、「此のフィルムの原本は有名な松平金岳公子の筆写になるもので、」の文章や、跋文九頁所載「開祖真聖著観心本尊抄見聞写真本の発刊に寄せて」と題する文章の、「四国高松松平家一門の金岳公子書写による観心本尊抄見聞三巻を」とする文章は、よって厳密にいへば、正しくない。
- ⑤ 『テキスト本』はじめより二十九丁ウまでは、公子の筆とは思われるが、松平金岳公子九十年記念奉賛会発行の『松平金岳公子小傳遺著集』所収の「梶原竹軒」原著による『金岳公子小伝』の中の「用人及家士」の頁に（二〇）（二二頁）「同【長尾】織衛勝元（奥坊主）此人は藻城武史又松渡と号し公子の記室にて大抵の御著書は此人の謄写に成り書風までが少し似た処もあり【中略】同【長尾】柏四朗勝貞（勝元嗣子）此人も公子の秘書役にして詩文を能くす数多くの著書類を謄写せり」（内は著者補。尚同様の記載が同著四十七頁「公子の師及門下」の項にも見られる）とある記述よりすれば、書風の似通った長尾勝元の筆写かもしれない。また後者の筆写者の字は、前者に比べるとやや劣りはするものの、仏教文書独特の略字の記し方等は、仏教文書に慣れ親しんだ者の筆に成ることは、ほぼ間違いなからう。公子の家士の何某かが筆写したものであろう。
- ⑥ 保田妙本寺十四世大夫阿闍梨日我が、天文二十三年（一五五四）九月に著した『鎌単問答見聞』（『日蓮宗宗学章疎目錄』）が記されている。

本隆寺日真人著「観心本尊抄見聞」について

- ⑦ 公子の蔵書の中に、『御蔵書目録 全』という一冊があり、これは、当時宮脇龜阜荘（公子のお屋敷の有った処、現在は高松市立龜阜小学校）内に有った蔵書の目録を記したものであるが、この書物の二十六丁下に、「御寝所御本棚南二而下之分」という項に、「観心本尊抄見聞 三冊」と明記しており、公子の蔵書に間違いないことが確認できるのである。尚この目録の成立は、年記のないため判らないが、日隆上人の御聖教等が完備していることから考えれば、公子晩年か、もしくは没後の製作ではないかと考えられる。再考
- ⑧ 註⑤同本 四十六頁 「仏書を謄写せしめらる」の項
- ⑨ 前同本 五十六頁 「臨終」の項
- ⑩ 上巻十三丁ウの欄外に朱筆の書き込みがあるが、更にその下に墨書で、「此書人不用也」とあり、幾人かの人が公子以後この本に目を通し、朱筆の書き込みをしたことがうかがえるのである。
- ⑪ 双鉤填墨（そうこうてんぼく）とは、下に写すものを置き、薄紙をその上に重ね、敷き写しに輪郭をかごじに写し取り、後に中を墨で埋める技法のことで、中国古来よりの技法である。例せば書聖王羲之の書蹟として伝わったものは、この双鉤填墨のものか、石碑等に刻まれ、拓本に採られたものしか現在には伝わっていない。
- ⑫ 日頭上人は、寛永九年（一六三三）越前の生まれ。元禄二年（一六八九）大阪久本寺にて遷化。天和二年（一六八二）尾張長栄寺より晋山、在住八年の間に御聖教を修復、完成された。又『御聖教惣目録』を記す。なお『御聖教惣目録』は、『桂林学叢』第四号二二二頁～二四二頁に所収されている。
- ⑬ 日妙上人は、寛政四年（一七九二）十月十八日本興寺眞首となり、享和二年（一八〇二）退山、在住十一年
- ⑭ 日暉（にちこう）上人は、寛政十一年（一七九九）八月十三日本能寺眞首となり、享和元年（一八〇二）十二月十一日遷化。在住三年。
- ⑮ 日善が何時の時代の僧なのか、今のところ簡単に比定できそうもない。あるいは、両山二十世誠諦院日善（一六五六）のこのか、再考。また奥書の大経房という呼称については、林真芳師の『日真教学の研究』によれば、日真人は、康正元年（一四五五）に妙境寺日全上人を師として得度、直磨を慧光と改め、のち大経房・常不輕院日真と号した。（取意）と記されている。

る。(二二六頁) また『日像門家分散由来記』によれば、「一、本隆寺之事、去、長享年中、大経坊日真、大林坊日鎮、云一人、始トシテ云」(『日蓮宗宗学全書』第一八卷二一〇頁)や「長享二年、夏、頃(中略)大將、大経坊日真也云」(同書同頁)などの記載があり、長享年中(一四八七—一四八九)の頃は、大経房(坊)が通用していたと考えられる。

上卷妙忍師写本奥書

于時

明治元戊辰、從初冬中旬至同下旬

謹書寫之者

法子

妙忍「花押」

此為所求之主精信者

讚州引田浦龜屋莊兵衛事年五十九才

之時、乍恐就願口依

源頼該尊公被思召、同年孟夏御下ニ相成

此三卷之御秘書尤 尊公御手入有之候処

(二二七五頁)

難有奉拜見、其後右月日ニ為所調之、後代

永不易之重寶也、以茲上為ニ天下至万民

自受法業、令レ帰、諸乘一仏乘ニ奉祈之者也、

南妙法蓮華經 〰〰

(二二七六頁)

本隆寺日真人著「観心本尊抄見聞」について

中卷妙忍師写本奥書

年号「上」之同「戊辰」從初冬下旬至中冬上旬

謹書寫之者

沙門

妙忍「花押」

此主精信土庄兵衛

為所持之御書後世永以何比之、實是万代

不輕之重宝成而已

只

南妙法蓮華經 〵 〵

(二七七頁)

下卷妙忍師写本奥書

年号上「同」戊辰「從中冬上旬至同中甸

謹書写之者

法子

妙忍「花押」

此為所求之主願「付記」之

源頼該尊公行年六十歲之秋八月六日夜

正五時御拵(逝)去、年号「上」同「戊辰」、御法名號

本行院殿慈門金岳源該日教大居士尊靈

大慈大悲大恩御報恩謝徳、南妙法蓮華経々々私云

但日教尊、中興大聖人之御再誕、歟、誠已來

(二七八頁)

真俗字匠之不及処、権実本迹雜乱之時三災

七難等盛年々月々日々刻々、起重処実ニ相治捨

権取実本勝迹劣時相應之御法門相正御諫

言之御書等、其外諸国至万民種々夫々之御書物等

相弘置、現ニ種脱之者有数聞後代ニ永是、

難有物讀之方、誠ニ闇夜ニ日輪之出如成而已

アラ難有ヤ、アラ頼母子キヤ

南妙法蓮華教々々

(二七九頁)

とあるが、『テキスト本』には、当該部分の記載はない。又、『法華宗真門要集 卷三』所収の謄写刷りの『本尊抄見聞』の上、中、下巻のそれぞれの最後の部分に以上の文章が紹介されているがこれも『テキスト本』にはない。又謄写刷りの当該部分の語句に、二、三、『マイクروفイルム本』との異同が認められることを付記しておく。

- ⑬ 正式には、『真・諦法流正伝抄』といい、後世更に出藍の誉れの『青藍抄』と称された。その名の示すようにいわば真師・日脩の師慶隆院日誦(一四七四―一五五八)・日脩と相承された教義を正しく伝える書物として書くという形式はとっているものの、別名が示すように、真門流の教義を大成した書物といえよう。

- ⑭ 『日蓮宗宗学全書』第十卷二四四頁

⑮ このことは、学林教授大平宏龍先生のご教示をいただいた。この本は未だ活字にはなっていないが、明治十四年に、赤沢泰賢師の手により、謄写刷りの書物として、製作されている。